

門徒推進員という生き方【理念】〔解説文〕

今般、門徒推進員の具体的な役割や願いを明示するため、「門徒推進員という生き方【理念】」を作成いたしました。

現在「年齢を重ねて、寺院の活動に取り組むことができなくなったから、門徒推進員を続けられない」という方がおられます。

また、門徒推進員とは何なのかをご存知いただけていない僧侶や門徒の方がたがおられます。

そこで、門徒推進員とはどのような存在なのかということを理解し、「連研」や「中央教修」の受講を勧める際の一助にさせていただきたいとの思いで作成したのがこの「門徒推進員という生き方【理念】」です。

私たちの教団の運動は、時代を経て名称等の変更を重ねられてきました。門徒推進員は、この【理念】に基づいて教団が進める運動に積極的に参画し、推進していく門徒をいいます。

【門徒推進員とは】

阿弥陀如来は、私たち生きとし生けるすべてのものをお浄土に生まれさせ仏に成らせて、本当のしあわせと安らぎを与えたいとの願いを建て、その願いを成就して、今「南無阿弥陀仏」の名号となって私に届いています。

そして、阿弥陀如来は、あらゆるいのちは、あるがまま等しく尊いことを知らせるため、お浄土を私たちのめざすべき世界と示し、はたらきつづけてくださっています。

仏教は、仏さまに成る教えです。仏さまに成ることが目的であり、仏さまに成ることが本当のしあわせと安らぎを得ることです。浄土真宗という仏教は阿弥陀如来のひとりばたらき（他力）で往生成仏させていただくのです。

その願いとはたらきを聞きつつお浄土をめざしてお念仏申して生き、阿弥陀如来の願いを私の願いとして生きる人を念仏者といいます。その人を、親鸞聖人のみ教えを仰ぐ「門徒（同じ門下の^{ともがら}徒）」といいます。

『浄土真宗辞典』には、門徒とは「同じ門下のともがら。同じ教えを奉ずる同朋、または個人のこと。」「本願寺派では、宗法などに規定があり、僧侶及び寺族以外の者で、宗門の目的を遵奉し、本山に帰向し、寺院に所属して、その寺院の門徒名簿に登録された者をいう。」と記されています。

この「門徒推進員という生き方【理念】」においては、法規に規定される用語としてではなく「門徒」の内実を重視してこのような表記にいたしました。

阿弥陀如来の願いとはたらきに出遇った私たち念仏者は、社会にはさまざまな問題があることや、私たちの教団が差別をし、戦争に協力してきた負の歴史の事実から、阿弥陀如来の願いの通りにはなっていない現実気づかされます。

それらの現実を他人事とせず、私たちの社会や教団が阿弥陀如来の願いにかなうものであるように、み教えに問い、聞き、語り、共に育ちあいながら、解決し克服する歩みが念仏者という生き方です。

「連研」を受講し終えて「中央教修」を修了して、自らの生き方の中心となるみ教えが明らかになり、阿弥陀如来のお心を私の「ものさし」（価値判断基準）とし、それぞれが自覚と主体性をもって歩み続ける念仏者を門徒推進員といいます。

4段落目以降は、多方面から発せられる、門徒と門徒推進員の違いは何なのかという問いに応える意味合いがあります。本来ならば違いが無いのが理想ですが、「連研」や「中央教修」を経て、単に仏教用語を学び、教学の知識を身につけることにとどまらず、人生の中で「み教えに問い、聞き、歩む」日常生活を送っていただきたいという願いです。それが「み教えを依りどころに生きる」ということでしょう。

【門徒推進員として】

門徒推進員は、生涯念仏者の自覚をもって寺院、家庭、職場、及び地域などで、み教えに基づいた生活（生き方）を続けます。

さらに、寺院・組・教区・特区・開教区（開教地）の門信徒・僧侶・寺族とともに、教団の運動の推進にあたります。

「中央教修」での「門徒推進員とは」の單元では、「資格ではなく自覚」ということがいわれてきました。しかし「自覚」といいながらも何らかの「活動」をしなければならないという意識を与えてきてしまいました。その結果「活動」ができなくなると門徒推進員を辞めたくなる方も多く見られました。「自覚」を持って自発的に現れてくる「活動」は尊いことですが、必ずしも「活動」が伴わなければならないわけではありません。

お念仏申ささせていただくその姿が周りの人々に伝わることこそ門徒推進員としての生き方として大切な役割でありましょう。

この「門徒推進員という生き方【理念】」では、それぞれの日常生活で、それぞれの生涯を貫くような“門徒推進員という生き方”があることを明示する意図があります。

<2023(令和5)年6月30日策定>